

仲間

峰さくら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

お宝を盗むのに失敗した次元達。

仲間

目

次

1

仲間

(クソッ、失敗か……!!)

俺達は山奥にひつそりと建つ城に浸入しようとしていた。
ひつそりと建つ…といつても財宝の隠された金庫のあるせいで警備は厳重だ。

下調べはしつかりしているのだが。今回の作戦には少し無理があつたようだな。

トラップも半端じやなく仕掛けられている。
ルパンが先に別経路から侵入してははずなのだが、合図がなければ脱出することになつていて。

予定の時間を5分過ぎたくらいか…まだ合図がない。

俺と五工門は山道に身を潜めていた。

「次元、そろそろ撤退か?」

五工門が口を開いた。

「ん…、ああ、ルパンからの合図はないな。」

その時だった。

城の方から大きな爆発音が聞こえた。

「な、なんだ??」

俺は辺りを見渡す。

城の方から煙があがつていた。

するとルパンから通信が入つた。

『次元、五工門、撤退だあ。作戦Bの場所で待つてるぜ!!』

作戦B…つまりは失敗。

俺と五工門は撤退のルートを走り出した。

すると、

ドカン!!!!

「おわっ!!!!」
「む…!!!」

近くの木がいきなり爆発した。

木は真っ黒になり、周辺の土が抉れている。

侵入者を防ぐトラップか。

「まざいな…」

ドカン!!ドカン!!!

今度は二回爆発が起きた。

いずれもそう遠くはない場所。

「五工門、急ぐぞ!!」

黙つて頷く五工門と共に、ルパンと待ち合わせている場所まで走る。

走っている間も爆発音が聞こえていた。

辺りに人の気配もなく、人が住めるような場所ではないため、爆薬の使用量も容赦ない。

ドカン!!!ズズズ…

すぐ上方で爆発音がした。

と同時に地響きのようなくさばな音…。

「……………五工門、危ねえ!!!!」

爆発音がした方に目をやると、五工門の方を目掛けて巨大な岩が落ちてくるところだった。

無意識に俺は五工門を突き飛ばす。

ああ…………岩の下敷きか…………。

ま、悪くない人生だつたか…………。

「いてて…………。あれ？」

目が覚めた。

生きてる。

「次元!!」

俺の顔を覗き込んだのは五工門だつた。

「ああ…五工門…生き 「愚か者―――!!」

五工門が大声をあげる。

俺は驚いて目を丸くした。

すると五工門は子供のように泣き出した。

「じげ…、拙者には…つ、この、ざ、ざん、斬鉄剣が…あるから、岩なんて…つ、岩…なんてつ…」

嗚咽で上手く喋れない五工門。

すっかり斬鉄剣のことを忘れていた。

きつと五工門なら落下物くらい見事に斬つて退けるだろう。ゆっくりと起き上がり辺りを見ると、ここは洞穴のようだ。

五工門が運んできてくれたんだろうか。

「悪かった。五工門には斬鉄剣があるんだつたな。」

へらつと笑つて見せた。

聞けばあのあと、俺が五工門を突き飛ばしたせいでよろめいてしまい、斬鉄剣を抜くのが遅れて俺が下敷きになる直前で岩を斬つたらしい。

しかし、直前すぎて岩が落下した風圧で二人とも吹き飛んだそくな。

五工門は上手く着地し、衝突しそうだつた俺を受け止めてくれたみたいだ。

余計なことしちまつたな。

「すまねえ、咄嗟に手が出ちまつたんだ。」

「無事だつたから良いでござる。でも危ないことはもうするでないぞ。」

涙はおさまつたようだが微かに涙目。

だつて…なあ？

大事な仲間を失いたくないじやねえか。でもそれは相手だつて同じこと。

「ありがとよ。」

五工門の頭に手を乗せた。

ガガガ…ピー…ガガ『じげくん、ごえもくん！』

通信機から声が聞こえる。

ルパンだ。忘れていた。

「こちら次元、ちょっと予定が狂つちまつてな。今どこだ？」

『俺？ずっと待ち合わせ場所で待つてんだよ。心配したじやないの

』。

通信機から聞こえたルパンの声も泣きそうな声だった。

「今から行くぜ。遅くなつて悪い。」

『お茶して待つてるぜ。』

俺は一人が好きだつた氣がする。

でも、こうして仲間ができた。

悪くねえな。

「さ、五工門、行くか。」

「うむ。」

F i n.